

そのまま斉彬の下で西郷が順調に出世していれば、増田に「死生を共にせんのみ」と言われる程の人間になっていたかどうか……………。

それが良かったのか悪かったのかは別にして、1858年（安政5年）西郷が32歳の年に、島津斉彬が急死してしまう。

大老井伊直弼のスタートさせた圧政に対し、斉彬が三千の精鋭を率いて上洛の上、幕政改革を実行しようとしていた矢先のことであった。

時が時だけに、その死は、隠居している父斉興が薩摩藩の崩壊を恐れ斉彬を毒殺したのではないか、という噂が立った。

この時斉彬が起こそうとしていた行動は、西郷の献策を入れたものであり、彼は先発して京にいた。

そこで斉彬の来着を今か今かと待ち受けていた西郷は、どんな気持ちでその訃報を聞いたであろうか。

政治状況も立場も野心も違うが、心情としては毛利攻めで高松城を落とす寸前までもってゆき信長を待ち受けていた秀吉が、本能寺で信長が斃れたことを知らされた時と一脈通じるものがあるかも知れない。

一瞬、あの秀吉でも

「俺はこれからどうなるんだ、どうすればいいんだ」

と思っただろう。しかし、それは一瞬であった。

呆然としている秀吉の耳元で、頭の回転の良すぎる参謀黒田官兵衛が

「殿、チャンスでございます」と囁く。

内心を見透かされたようで、
それを嫌な顔で聞いている秀吉の表情が目につく。

彼は、時を待たず天下人を考えた。

西郷は・・・・・・殉死を考えている。

結果としては、大筋で斉彬の遺志は西郷によって実現されるのだが、
地球規模でものを見ることができ、
実行力もあった斉彬が生きていれば、
明治維新はもうひとつの違う形のものとなっていたであろう。